

窓のあちらとこちら

牧師 山本 護

秋風が吹き、こども礼拝堂に実った稲の香りが充満した。子供の頃の私は標準的な悪ガキで、小さな怪我や冒険は日常的な禍福でした。ツリーハウスまがいの秘密基地も作り、樹上の窓でも平気で遊んでいた。でもこれは柔軟性あつての少年アドベンチャーで、何かと悩ましい青年が窓に腰かけることは危険です。

「パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた(使徒 20:7)」。語るパウロに留まらず、聴衆もそれだけ聞き続けられる余裕と関心があったらしい。とはいえ「エウティコという青年が窓に腰かけていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた(20:9)」。

麦の穂でも口にくわえ、長い脚を持って余すようにして窓に腰かけ話を聞いていた求道的な青年エウティコ。初めはキリストの十字架や救いの出来事に心燃やしていたが、パウロの話はさすがに長すぎてうつらうつら、ガクッと寝入って窓から落ちてしまった。深刻な事故ですが、どことなく滑稽にしてリアルな場面です。

「パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。[騒ぐな。まだ生きている]

(20:10)」。青年は気を失っていたのでしょうか。いや聖句通り、死んでしまったのだと思います。だが「かがみ込んで」命が吹き込まれ、死者は生きる者になり、人々は大いに慰められました(20:12)。あの古い預言者エリシャ(BC.850年頃)による甦りの業が思い起こされます。

「エリシャが家に着くと～子供は死んで横たわっていた(列王下 4:32)」。「エリシャは子供の上に伏し、自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込むと、子供の体は暖かくなった(4:32)」。主なる神ならば泥人形の「鼻に命の息を吹き入れ、

人を生きる者とされる(創世 2:7)」。預言者エリシャと使徒パウロは、神の使命を帯びたその全身をもって「神の息(聖霊)」を死者に吹き込み、あちらからこちらへ、死から命へと呼び戻しました。

生と死を分けた「窓」。窓は二つの領域の境を象徴的に表しています。長々と語られたキリストの話はそんな窓を横断して、あちらで死者となった青年の胸に刻まれていた。彼はキリストの言葉によって、窓のこちらで生きる者となりました。私たちはこんなキリストの命の言葉を、今はこちらで、うつらうつらしながらでも胸に刻んでいます。Ω

